

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第3回 あしなが育英会のウガンダとの深い関係

連載3回目の「カンパラ通信 ～ナカセロの丘から～」をお送りします。

8月27、28日の2日間にわたり、ケニアのナイロビで安倍総理大臣参加の下第6回目の東京アフリカ開発会議が、というよりもT I C A Dという方がわかりやすいかもしれませんね、開催されました。ケニアで開かれてもT I C A DのTは「東京」ということなのですが、ここは第1回開催地が東京であったことの遺産としてお許し願いたいと思います。いずれにせよ、今回T I C A Dが初めてアフリカで開かれたという意味でこれまでとはひと味違った会議となりました。

同会議のプログラムの一つとして27日夕方、安倍総理大臣主催レセプションがありました。そこで顔満面の笑みを浮かべたウガンダのエイズ孤児達がエネルギッシュなダンスを、安倍総理はもちろんのこと、アフリカの歴々の指導者達・国際機関の長達の前で披露し、嵐のような拍手を浴びました。

本日は、どうしてこの子達がウガンダからナイロビへわざわざ出かけこの晴れやかな舞台に立つことになったのかをご紹介します。



(写真1 安倍総理主催歓迎レセプション)

皆さん、「あしなが育英会」のことは、街頭募金をしている若者達の姿を見たり、こうした活動を聞いたことがあるのではないのでしょうか。あしなが育英会のホームページの言葉を借りますと、1961年に新潟で岡嶋信治氏の姉と甥が飲酒運転のトラックで亡くなられ、1963年には玉井義臣氏の母上が暴走車にはねられ1か月あまりの昏睡状態の末亡くなるという痛ましい事故がありました。この交通事故遺族のお二人が中心となり、1967

年、交通事故遺児を励ます会が誕生し、1969年には交通遺児育英会が発足しました。街頭募金や継続的に送金して下さる「あしながさん」のおかげで進学できた交通遺児が、「恩返し運動」として、1983年に災害遺児の奨学金制度をつくる運動が始まり、1988年に災害遺児奨学金制度が発足。さらに、進学した災害遺児が病氣遺児の奨学金制度づくりを呼びかけ、1993年の病氣遺児奨学金制度発足に合わせて、あしなが育英会が誕生しました。

あしなが育英会を創立以来長年育ててきた玉井会長が、ナイロビでのTICADVIの前にカンパラを訪問された時に私に「世界中の日本の大使館や総領事館の館員が20人くらい集まれば一人くらいはあしなが運動に関わっていると思いますよ。」とおっしゃいました。その翌日、週一回の大使館の定例会議に集まった日本人は12人でした。念のためこのことを聞いてみましたら、いました！館員の一人がロンドン留学時に街頭での告知活動に参加したとのことでした。玉井会長のおっしゃったとおりでした。それだけ多くの日本人が関わってきた活動であることを改めて実感しました。

日本生まれのあしなが運動が、なぜ海外にも拠点を求めるようになったのでしょうか、そして、最初の拠点になぜウガンダが選ばれたか興味を持ったのでした。その二点を岡崎初代あしながウガンダ代表が回答してくれました。

「アフリカではエイズ流行が深刻で、たくさんの貧しい孤児を生み出していることを知って、日本の遺児と同じように困っているアフリカの孤児に教育を受けられるようにしたい」と思っていたことだそうです。そしてアフリカのどこの国にしようか思案された結果、まず英語が話せる国でなければという理由から南アフリカではと思ったそうです。残念なことに南アフリカはNGO登録が難しいということで断念されたそうです。その点、ウガンダではそういった問題がなかったこと、国民の高いエイズ感染率とこの問題に政府主導で熱心に対策を開始したウガンダに白羽の矢が立ち、居を構えることにしたとのことでした。

さて、その結果、2001年11月無事にNGO登録され、ウガンダの首都カンパラ近郊のナンサナに土地を確保し、エイズ孤児に対する心理的支援、教育支援をする活動を開始しました。何と驚いたことに開所式にはムセベニ大統領がご臨席されたということです。このような日本の団体がウガンダにあることを、私は2006年1月にウガンダに赴任し初めて知った次第です。あしながウガンダの活動はウガンダで取り組んでいる日本人の活躍として注目すべきものであるだけに、機会がある度にウガンダ官民関係者にその存在をアピールし、日本政府から要人や国会議員がウガンダを訪問する時にはナンサナの事務所や活動を視察してもらいました。そのようなことを通じて佐藤さんという若い現地代表とも知り合い、親しくさせていただいておりました。



(写真2 あしながウガンダ「寺子屋」)

そういう縁もあり、今回大使として着任しその後「あしながウガンダ」がどのような活動を続けているか興味があったので、着任後1か月にはナンサナを訪ねました。以前からあった棟はあまり変わらず懐かしい思い出に浸っておりましたら、私の前で35人くらいのウガンダの子供たちが民族舞踊の披露を始めてくれたのです（実は披露してくれたダンスは、冒頭で紹介したナイロビでのTICADVIのレセプションの踊りと同じで、練習中とのことでした。）。とても表情豊かでエネルギッシュなダンスでした。

そして近隣にあしながウガンダの施設がもう1か所、最近新設されたばかりの近代的な建物がありました。「心(こころ)塾」がこの新しい建物の名前です。玉井会長の肝入りで始めたあしなが育英会によるアフリカの若者のための活動の集大成的な構想「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」の拠点的活動を「心塾」では行っています（ここでこの構想の説明を始めるとこのカンパ通信が長くなってしまうので、インターネットで検索していただければ幸いです。）。具体的には「心塾」では間もなく日本や欧米の大学に留学する英語圏及びポルトガル圏のアフリカ諸国から選ばれた優秀な遺児が、それぞれの留学先大学に円滑に進学できるよう事前準備をしています。その手伝いをしているのが、世界中から来ている若いボランティアの人々です。

「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」は何とも壮大で頼もしい響きですね、志のある多くの若者達が着々とこの構想を進めていることに驚きましたし、あしながウガンダがこの15年間活動を積み重ね、更に拡大していることを今回の訪問を通じて知りました。



(写真3 世界が我が家2016)

もうひとつのあしなが育英会の大きな活動が「世界が我が家」という音楽イベントです。これは、ウガンダのエイズ孤児の子供たちと日本の東日本大震災で親御さんを亡くされた中高生、それにあしなが育英会の命名のヒントとなった「あしなが叔父さん」の小説を書いたジーン・ウェブスター女史が卒業したアメリカのバツサー大学の学生という、異なった3つの文化を体現する三者が踊りと歌、さらには日本の太鼓等の演奏を組み合わせた音楽コラボレーションです。

「世界が我が家」は、まず2014年に日本で披露され、翌2015年は米公演を行い、そしてついに本年8月にカンパラでの公演が実現したのです。カンパラのそれは、いわば締めくくりの凱旋公演となりました。

この公演のために、高齢の玉井会長をはじめ、藤村副会長、天野副会長といったあしなが育英会の幹部の方々もウガンダ入りしました。公演会場はカンパラ郊外に位置していて約1000人の収容能力がある野外ステージを有するNdereセンターです。

8月23日午後7時開演予定でしたが、客席に座りきれないやはり1000人程の立ち見客の入場に時間がかかり、超満員の中20分くらい遅れで始まりました。出演者はウガンダから35人、日本から20人、アメリカからは20人当地のスタッフも入れると総勢1000人余りの大公演でした。盛大な拍手と感動の渦の中、音楽ショーは終了し、Ndereセンター代表による挨拶に続いて、私も挨拶する機会をいただきました。その挨拶の中で、私は、お世辞ではなく心底このショーに感動したこと、その中でもウガンダの子供たちの顔いっぱいの笑顔で躍動的に踊るダンスが素晴らしいものであったとコメントしました。それほど子供たちの笑顔は忘れられないものでした。

その後、Ndereセンターの代表とゆっくりお話する機会がありました。日本の少女少女たちは公演の9日前にウガンダ入りして、そのセンターに併設されている宿泊施設で一緒に生活をしたのですが、日本人の中高生の規律正しさに感激したとっておりました。代表が、「何か困っていることはないですか？」と尋ねたのですが、「何も問題はない。快適で

す。」という回答だったそうです。行儀良さからの発言なので、本当にそうなのか疑問にも感じたけども、日本人の若者の礼儀正しさ、規律正しさに感銘を受けたとのこと。そのことを聞いたことが、私も日本人の一人として大変誇らしげに感じた次第です。

実は、玉井会長は、このカンパラ公演を見守ってからナイロビに入り、安倍総理大臣主催によるT I C A D出席者の歓迎レセプションに出席する予定でした。しかし、玉井会長は83歳とご高齢なこともあり、日本からウガンダまでの長旅で体調を崩されてしまい、残念なことにこのカンパラ公演では聴衆の方々に挨拶ができませんでした。しかし、ナイロビに入るまで無理をせずしっかり休息されたおかげで、安倍総理大臣主催レセプションには元気な姿を見せることができました。



(写真4 玉井会長他幹部と筆者)

実は、冒頭で紹介しましたT I C A Dでの安倍総理大臣主催レセプションにおけるウガンダの子供達の躍動感一杯のダンスを披露することになったのは、安倍総理大臣が玉井会長とあしなが育英会が15年にわたりウガンダのエイズ遺児を支援してきた実績とサブサハラアフリカの遺児を世界の大学へ進学させる事業を推進していることを評価していることの表れとして望んだという背景があったとのこと。玉井会長には、ご健康に留意しつつ、これからもお元気でご活躍されることを心から祈念しております。

(この「世界が我が家 (At Home in the World)」の様子の一部はYoutubeで見られます。)

(以上)